

特集・広島平和記念資料館 いくつもの失われた未来を思う

平成31(2019)年4月の本館リニューアルオープンから4年が経った平和記念資料館。5月に開催されたG7広島サミットでも注目を集めました。
「以前行ったことがあるけれど最近は何も思い出がなくて、訪れてみてください。」
岡同館学芸課(☎241-4004、☎542-7941)

G7広島サミットで首脳らが来館
5月19日~21日に開催されたG7広島サミットでは、参加した各国首脳らがそろって同館を訪問しました。

戦時下にある自国と重ねて
ウクライナのゼレンスキー大統領も同館を訪問し、現在の自国と被爆した当時の広島とを重ね合わせ、「いつか広島のように再建されることを夢見ている」と復興に向けた思いを語りました。

展示概要

【常設展示】

1 導入展示

被爆前のびっぴりと建ち並ぶ家々、商店街のにぎわい、子どもたちの笑顔の写真。被爆前の広島には多くの人々の暮らしが息づいていたことを物語ります。8月6日、上空600mで原爆がさく裂し、人々の暮らしが失われた瞬間を映像とパノラマ模型で伝えています。



2 8月6日の惨状

爆風で折れ曲がった鉄骨、火災の高熱で変形した金属や瓦、建物疎開作業中に被爆した生徒たちが身に付けていた衣服の展示。遺品や絵などの資料が、あの日の惨状を静かに語ります。



3 放射線による被害

皮膚に無数の血の斑点が出た兵士や頭髪が抜けた姉と弟の写真。原爆から放出された大量の放射線が人々の体をむしばみ、外傷のない人や被爆直後に市内に入った人にも影響を及ぼしたことを伝えています。



4 魂の叫び

原爆で亡くなった人の遺品と遺影や本人、家族の言葉の展示。「痛いよー、苦しいよー」「お母さん!」「あの子はどこに…」。亡くなった人、残された人、一人一人の心の底からの叫びを伝えています。

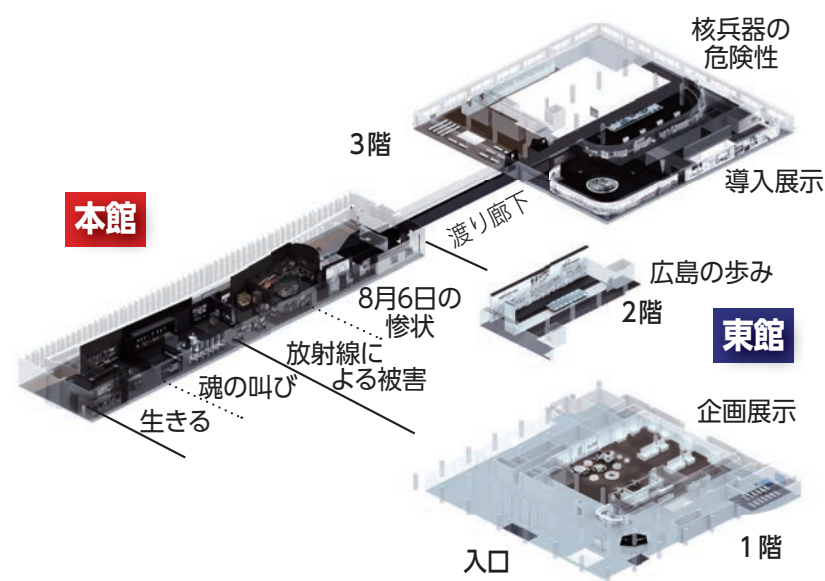


5 生きる

背中にケロイドが残る男性の写真や被爆から10年後に白血病で亡くなった少女が病氣回復を願って折った鶴。惨禍を生き延びた後も、多くの困難と苦悩に直面し、心身に残る傷を抱えながら生きる人々の姿を伝えています。



佐々木禎子さんが折った鶴
佐々木繁夫・雅弘寄贈



6 核兵器の危険性

原爆の開発や投下の経緯、その威力について、写真などを展示。原爆の模型や熱線を受けた瓦など、手で触れることができる展示も。
核実験による被害や核兵器廃絶に向けた国際社会の動向も伝えています。



7 広島歩み

被爆前後の広島市の歴史について写真などで解説しています。
原爆で破壊された広島で自らの生活を再建させつつ街の復興に立ち上がる市民の姿を伝えています。国内外の人々も支援の手を差し伸べました。

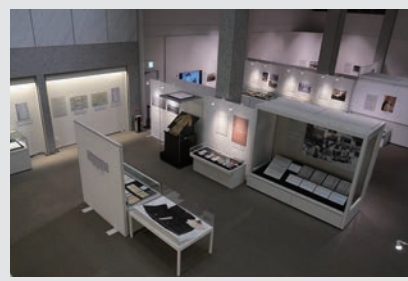


【企画展示】

企画展「広島戦災児育成所 - 子どもたちと山下義信」を9月11日(月)まで開催

1945年12月、私財を投じていち早く私立の育成所を立ち上げた山下義信氏。育成所の歩みと同氏の生涯を紹介しています。

企画展を担当した学芸員は「田舎に集団疎開していた子どもたちは、原爆の被害を受けずに助かりました。けれども市内にいた両親や家族を失い、引き取り手のない原爆孤児として育成所などの生活を余儀なくされました。山下義信氏が



残した多くの保育日誌などから、子どもたちに対する愛情や責任感が伝わってきます。原爆孤児という存在・歴史があったことを知ってほしいですね」と話します。

心に残った展示 -思いを言葉にして 胸に刻む-

G7広島サミットが終わった5月末、世代の異なる3人が同館を見学し、それぞれが心に残った展示についての思いを語り合いました。



市内で育った20代。7歳の弟がいる(下記感想の●)



県外出身で、2年前に移住。4歳の子どもがいる30代(同●)



市内に在住で、2人の子ども、5人の孫がいる60代(同●)

魂の叫び

中学生のズボン

新田孝洋さん(当時中学2年生)は動員先の八丁堀で建物疎開作業中に被爆しました。父・孝作さんは、あちこちを必死で捜し回りましたが見つかりません。これが最後と、「そこで子どもが呼んでいるような気がして」動員先とは別の場所に行き、息絶えた孝洋さんを見つけました。



新田英明寄贈

●幼さの残る顔写真に、自分の弟が重なる。この少年の父親は、惨状の中、「そこで子どもが呼んでいるような気がして」

見つけ出した。子への愛情の深さを感じる。この少年の父親は、惨状の中、「そこで子どもが呼んでいるような気がして」

魂の叫び

三輪車、鉄かぶと 姉弟の遺影

鏡谷伸一ちゃん(当時3歳)は、三輪車で遊んでいる時に被爆し、亡くなりました。姉の路子さん(当時7歳)も倒れた家の下敷きとなり、亡くなりました。



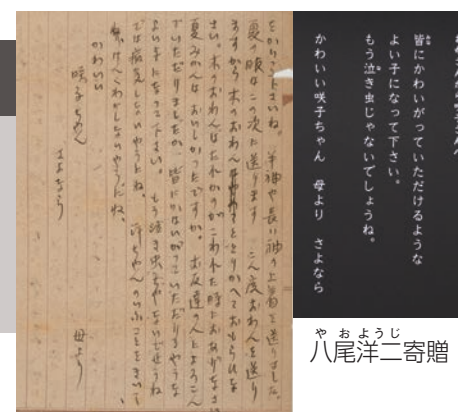
鏡谷信男寄贈

●幼い姉弟は仲良く手をつなぎ、少し緊張した面持ちでこちらを見つめている。写真館で撮影されたその時、こちら側には温かなまなざしを注ぐ家族がいたのでは。等身大の写真に近づけば、自分の孫を抱き上げるときに愛しさが思い起こされる。あの日、一瞬で断たれたこの子たちの未来を思わずにいられない。

魂の叫び

疎開先に届いた手紙 -お母さんから咲子さんへ-

原爆で亡くなった母・八尾春子さんが、娘・咲子さん(当時9歳)宛てに6月に書いていた手紙です。咲子さんは疎開先で受け取り、家族からの手紙を形見として大切に保管していました。



八尾洋二寄贈

●「咲子ちゃん 母より さようなら」の末文が目には焼きついた。手紙を書いたときは、きっとまた会えると信じながらも、最後の手紙になるかもしれないという思いだったのではないかと。手紙の本文からも子を思う親の愛情が

伝わってくる。母親からの最後の手紙を咲子さんは、どんな思いで読み返したのだろう。子を持つ親として胸がいっぱいになる。

人の姿を感じて、思いをはせてほしい

4年前にリニューアルした本館は、被爆者の視点で展示を構成し、「人の姿を感じてもらいたい」という思いで、寄贈者から聞き取った遺品の背景情報、残された家族の苦しみや亡き人への思いなどを伝えるようにしています。
遺品一つ一つに、物語があり、寄贈者の中には、遺品の前で、家族の名前を呼び掛ける人もいらっしゃいます。展示品

を通して、来館者が当時の人に思いをはせ、自分の感じたことと重ね合わせてもらうことで、より身近に捉え、二度と同じことを繰り返してはならないという考えを持つきっかけとなれたいと思います。今回紹介している展示はほんの一部です。館内で、被爆の実相に向き合ってください。



平和記念資料館 洛葉裕信学芸係長

利用案内

広島平和記念資料館
☑中區中島町1-2

☎8:30~18:00
●今年の7月は19:00まで
●8月は8:30~19:00(8月5・6日は20:00まで)
●12~2月は8:30~17:00
※入館は閉館30分前まで
☑大人200円、高校生相当年齢・シニア

(年齢証明が必要)100円、中学生以下無料 ※団体割引、減免あり
※東館1階・企画展示は無料
☑12月30日、31日(情報資料室は12月29日~1月1日閉室)
【音声ガイド(イヤホン)】被爆資料など64点を1点当たり1分程度で詳しく解説。東館1階で貸し出し(400円/台(団体割引あり))

